



【東方掌編】 判読不明のコデックス



日毎朝が遅くなり、お布団から出るのが億劫になる季節。新嘗祭もとうに過ぎ、里は冬景色に染まっていた。

障子の隙間から吹き込む風に背を丸め、隙間風を防ぐと立ち上れば、庭の日陰に霜柱。年の瀬も押し迫った事を感じながら、間もなく降り積むであろう雪を思いつし筆を止めていると、来客を告げる声があった。

「こんにちは、阿求」

「小鈴。どうしたんですか？」

本居小鈴 里にて貸本屋『鈴奈庵』を営む少女だ。

鈴奈庵は店舗こそは小規模だが、外来本や妖魔本の類まで取り揃えた品揃えで、里の好事家はおろか妖怪達の間でも名を知られた店である。彼女とは昔からの馴染みであり、幻想郷縁起の出版、改版でも公私にわたって世話になった。

「里に用事があつたからそのついでにね。この前のお礼と、見て欲しいものがあつて」

店のエプロンを付けたままということ、仕入れか何かの帰りだろうか。彼女は多少勿体ぶりながら、手にした包み卓の上に広げる。袱紗の中から姿を見せたのは一冊の古惚けた書籍だった。

書題もない素直な装丁は、古いがかなり丁寧な作り。ざつと見ただけでも数十年から百年近く前のものようだが、紙魚に食われた様子もなく綺麗なものだ。もつとおどろおどろしいものを想像していた

ところには拍子抜けだ。

「……さて、人皮の装丁なんてものでもないようですが」

「人皮なんて巷で言われているほど良いものでもないよ？ 案外見た目も地味だし、保存には向いてないし、強度もいまいちだから妖怪も魔法使いも好まないし。人間が書いた魔道書の箔付けに使われるくらいなもの。でもねえ、人間が人間の皮で綴るなんて、ありきたり過ぎると思わない？」

「……あ、はい」

同意もできず曖昧に頷いた。小鈴は、こと本に関しては少々度を逸しているくらいがある。だからこそ妖怪本なんて剣呑なものを集めていられるのだろうけれど——たまに友人として何か言つてやるべきなのかという思いに駆られる。自分の首を絞めることにもなるので結局口には出さないが。

「ともかく、貴方が持つてくるということはそれなりに面倒な代物でしょう」

能力は別にしても、小鈴の本に対する興味は少々度を越している。大抵の本であればどれだけ難解でもまず読んでしまうはずだった。それを取って私の元に持ち込むわけだから、真つ当な代物とは言い難い。「酷いなあ。阿求だから言つてるのに」

「……信頼してくれたのだと思うことにします」

吐息と共に、書を手に取った。

「読んで良いんですね？」

「うん」

「こりと笑顔。なんだか威圧されているような気がするが、気にすまい。再度念を押して書を開く。」

「一頁、二頁、順に頁を捲り——すぐにその事を理解した。」

「……ふむ。これは？」

「やっぱ知らないんだ」

内容については、この際特筆すべきことはない。そんなものよりも重要なのは奥付だった。

——著…八代目阿礼乙女、稗田阿弥。

書いてあることをそのまま信じれば、間違いない私——かつての私

が書いたものだ。

御阿礼の子が全ての記憶を継承しているというのは誤りで、先代の記憶まで仔細漏らさず把握している訳ではない。

けれど、幻想郷縁起を書くにあたって、穂田に残された歴史には余すところなく目を通していたつもりだ。手慰みに書いたものならともかく、本の形にして残したのならばどんなものでも把握しているはずだった。

「装丁とかを見る限りだと間違いない、ウチで刷ったものみたい。その裁断、お祖母ちゃんが使ってた古い型の癖が残ってるの」

「……その口ぶりだと、小鈴も半信半疑なのね？」

「そりゃね。阿求みだに、昔の事まで全部覚えてるわけじゃないけど、商売だもの。その辺が曖昧じゃ困るじゃない」

小鈴の話では、鈴奈庵でもこれを刷った記録はないという。私は吐息と共に改めて頁に視線を戻した。

「……………」

記憶にはない。が、そこに並ぶ文章は、見覚えがあり過ぎるくらいに私の（正確に言えばかつての私の）ものだった。

「これはなんとも面妖ですね」

「でしよ？」

にこりと笑う小鈴。ぱあと花が咲いたような笑顔は同性の目で見ても思わずどきりとするもので、この笑顔に参って読めもしない貸本を求めて鈴奈庵に通い詰める男性客も多いと聞くが、むべなるかな。

……しかし肝心の彼女の興味は、残念ながらインクの匂いをさせる紙面にしか向いていないのだ。世は無常である。

さて、今はそれよりもこの本だ。腕組みをしつつ思案を巡らせる。現時点で、これが私の手によるものであることは疑いようがない。

では、敢えてかつての私が記録を残さずにしたのか。だとするならば理由は何だろう。いくつか推測が付かないわけではない。

「本であるという事は、誰かに残そうとしたと考えるべきですね。それも、特定の相手ではなく不特定、複数の方」

もし相手が決まっているのなら手紙になるだろうし、私自身が必要と思ひ書き残したのなら、それについてなんの記録もないのは妙だ。

分量の問題は残るが、わざわざ製本する手間をかけてまで残す必要はないはずだった。

「そう言えば、これはどこで？」

「いつもの仕入れ先だけど……今から行くの？」

「ええ。私の書いた覚えのない私の本なんて、こんな面白そうなこと放っておけるわけがありません。大体、小鈴もそれを期待して持ってきたんでしょ？」

「……ふふ、ばれた？」

外套を手を立ち上げる私に、小鈴はくすりと微笑む。何やら上手く乗せられた気がするなと思ひながらも、私は今日の予定を全てキャンセルし、この不思議本の探索に費やすことに決めていた。



「——ん、来たか。開いているぞ」

「二無沙汰してます、慧音先生」

べこりと頭を下げる小鈴に続いて、私も門をくぐる。判読不明の書の正体を探るため、私達が最初に訪れたのは里の寺小屋。記録と歴史に関する事件の第一候補にして最有力者であるワーハクタク、慧音先生の元であつた。

「急にすみません。先生もお忙しいのに」

「気にしなくて良いさ。この仕事は歳末は走り回るのが仕事のようなものだからな。それに、昔の教え子が訪ねてきてくれるというのは、これでなかなか楽しみでもある」

白状すれば私も小鈴も、寺小屋ではそこまで良い生徒と言う訳で無かった。小鈴は興味に任せて好きな本しか読まないし、当時の私は少々——その、見聞きしたことを忘れられない、という自分の出自を鼻に掛けていた事があつて、黒歴史といふかなんというか。

そんな扱いにくい生徒に対しても、差別することもなく区別することもなく、平等に接してくれた先生は、立派な教育者なのだろう。いまだに先生に無言になって目の前に立たれると、頭突きを警戒して身体が凍んでしまうけれど。

「さて、折り入って私に聞きたいことがあるそうだが？」

ほとんど間を置くことも無くお茶とお茶受けが卓に並ぶ。いつでも来訪者を歓迎できるように備えてあるらしい。

「……」

快く迎えてくれた慧音先生に対して、疑念を向けるのは少しばかり

心苦しくはあつたけれど——ここで黙つていては何のために来たのかもわからない。ちらりと小鈴と視線をかわし、覚悟を決めて話を切り出す。

「この、本についてなんですが——」

上等な座布団の上、なにやら居心地の悪さを感じつつも、一通り説明を終るころには、慧音先生は難しい顔をして腕組みをしていた。一程程、稗田の知らない稗田の本という訳か。二人揃つてきた理由も良く分かる。……しかし、「ご期待に添えず残念だが、犯人は私ではないな」

バツサリと否定し、慧音先生はじろりと私達を睨む。思わず目をつぶつてしまう私の隣で、小鈴も頭を庇つていた。

そんな私達の反応に満足したように、先生は悪戯っぽく舌を出して見せた。

「まったく、無闇に人を疑うもんじゃない。……仮に、私が隠したというのが事実なら、それを馬鹿正直に明かす理由は無いだろう？ 第一、本当に隠しているつもりならそもそもその本が本居の店で見つかりはしない」

そうなのだ。先生の歴史を隠す能力は、あつた事をなかつた事にしてしまう。私が書いた歴史を隠されていたら、本も見つからない。私の記憶と本の実在、どちらかを遺すことは出来ないはずだ。

「それに、私が稗田の歴史に干渉できないのはお前が一番よく知っていると思つていたが」

「そうなんですよね……」

「解つたんなら教えてよ、阿求……」

そこが個人的には一番引つかかっていたところだった。頷く私に、小鈴が恨みがましそうに口を尖らせる。ならばやはり、慧音先生は違ふという結論になる。振り出しに戻つた調査に、私と小鈴は顔を見合せて吐息。

そこで慧音先生、何やら含み笑ひ。何なのかと問えば、

「なに、お前たちに教えてやれることがまだあつて、少し愉快なだけさ。稗田、本居、お前たちはとても優秀な生徒だった。だからこそ、自分の知識に囚われ過ぎる節があるな。謎を謎のまま解こうとするのは良くないことだ。こういうときは確かな事実だけを順に考えていけば、謎の本質がどこにあるのか分かるはずだぞ」

「……謎？」

意味が分からず首を傾けてしまう。この本は私が書いたものであり、鈴奈庵の製本によるものだ。けれど私はその本を書いた記憶がない。私が書いたものであるならば、私が覚えていないはずだ。

「逆に考えればいい。有る筈のものが無くなっているのではなくて、無い筈のものが有るんだろう」

「……？ どういうことですか？」

「要するに、だ。その本を書いたのは、お前ではない誰かなのではありませんか」

「そんな事が——」

できるはずが、と言いかけて。私はあることに思い至つていた。

◆ ◆ ◆

里外れの枯れ井戸へ、息を止めて飛び込んで。

奇妙な浮遊感とともに辿りつくのは、地下に広がる広大な世界。嫌われた妖怪たちの住まう旧地獄の旧都である。いまだ地獄の残り火が燃えることは、冬の地上よりは余程暖かい。しっとりとした天蓋の下をはらはらと降り続く雪は、服の裾につく前から溶け消えてゆく。

そこへ行き交う住人たちは皆、恐ろしげな妖怪達。旧地獄街道には地上の賑わいとはまた違った騒がしさがあつた。

「慣れてるねえ、阿求」

「前に取材で来たことがあるんですよ。入口までですけどね」

いかに地上との交流が始まったとはいへ、地底は危険度の高い妖怪たちの住む都であり、不用意に立ち入つた人間たちの末路がどうなるかは明らかだ。旧都を抜けるなら、用心棒の一人も確保するべきところかもしれないが、今日はひとまずその必要はない。

ぞつとするほど美しい橋姫が不満げに道を譲る中、こちらに向けてしずつと歩み寄ってくる小さな姿があつた、

「一見すれば、私や小鈴とほとんど変わらない年頃に思える。しかし彼女がゆつくりと歩みを進めるたび、屈強な妖怪たちが慌てて道を譲つていた。」

「ようこそ、地底へ。お待ちしていました、稗田阿求さん、本居小鈴さん」

眠たげな眼をした少女——古明地さとりと名乗った寛り妖怪が、今回の事件の首謀者であった。

「立ち話もなんですので、どこかでお話ししましょうか」

そう言つて、彼女は街道沿いの小さな茶店へと私たちを案内する。席に着くなり主人が慌てたように飛び出してきて、平身低頭しながらお茶菓子を運んでくる。

「飲み屋は多いのですが、どこも鬼向けの強い酒精しか置いていませんので、ここは貴重な甘味処なのですよ。……ご心配なく、人間にも食べられるのです」

どちらかと言えば素材が何なのかについて聞きたくあつたけれど、藪を突く真似は避けるのが賢明だろうか。自己紹介を（彼女には無意味なことかもしれないが）済ませると、彼女は羊羹を切り分け、口へと運ぶ。

「そうです。それを書いたのは私です」

「……どういうこと？ 阿求の本なんですよ？」

「彼女は人の心を読み、再現することができると言ってますよ」

難しく考えることではなかった。私に書いた覚えがないのだから、私ではない誰かが書いただけのことである。

この本は、さとりさんが想起した八代目御阿礼の子、稗田阿弥の手によるものであつたのだ。

「ええ。貴方の事は四季様に向つていましたから。覚えていないかもしれませんが、地獄でお会いしたこともあります。——ああ、ご心配なく。かつての幻想郷縁起には私は関わっていませんよ」

成程、是非曲直片に強い繋がりを持ち、文筆に長けるという条件だけで、そもそも彼女以外にありえなかつたのかも知れない。とんだゴーストライターも居たものだ。本人不在のところでありながら、ほぼ確実に本人であるなんて——

「どうしてこんなことを？」

問う私に、さとりさんはくすりと意地悪く微笑む。

「こうして、誰かを驚かせるのは、楽しいですからね」

「……なかなか良い性格をしてらっしゃいますね」

妖怪たちの中には、人間の恐怖心を食べる者たちがいる。寛りなんてその最たるものであるだろう。

「なるほど、これは警告だつたつて、ことだね」

小鈴が言う。恐らく、先代の私も地底に彼らが住んでいることを知っていたのだろう。しかし当時は地底との交流は禁じられていた。地底の妖怪たちは、幻想郷縁起の編纂にあたつて自分たちの存在が公になることで要らぬトラブルを招くことを恐れたのだ。

その為に彼女は、有り得ない筈のものを書いて本にし、それを敢えて人目に付くように地上へと送り込んだ。それが巡り巡つて今、私の手に届いたということになる。

「ところで」

ぼむと袖の手を打ち合わせ、小鈴が身を乗り出した。良く通る明るい声は、商売用のとつておき。お日様のような笑顔は稀覯本を見つけた時のものだ。

「古明地さとりさん！ 私、あなたの書いた本つていうのに、とても興味があるんですけど、自費出版を考えたりはしていませんか？」

「……ふむ？」

「何冊か読ませてもらいましたが、とても面白かったです。地底だけの流通ではもったいないと思うんですよ。鈴奈庵では少数からの印刷、出版にも対応します。湿気や温度変化にも耐性の強い特殊紙、特殊装丁にも対応しまして、現在こんなフェアも行つていますが——」

卓上にパンフレットを広げてゆく小鈴に、さとりさんは満更でもなさそうに感じる。心を読む妖怪ということだが、案外、これで分かりやすい性格をしているのかもしれない。

「ねえ、小鈴？」

「なに？」

「ひよつとして、私、いのように使われてない？」

「氣のせいだよ」

さらりと答える彼女に、私は吐息とともに額を押さえた。

(一)

平成24年12月23日 東方晴天祭 文：銅^{おち}おりは

発行：折栗坂^{オウリスカ}三番地^{サンバンヂ}(<http://oruzakadoin.com/froblog/>)

※本作は「上海アリス幻樂団」様の「東方 Project」の二次創作です。